

生まれる前の要因（遺伝）と生まれた後の要因（環境）で理解する親子のアタッチメント

梅村比丘（広島大学）

私は普段の授業などで、「親子の情緒的な絆」と定義される「アタッチメント」を分かりやすく正確に紹介するため、よく用いる考え方があります。それは、子どもが親とどのように関係性を育むのかを、生まれる前から決まっている「遺伝」による影響と、生まれた後に決まる「環境」による影響の2つに分けて考えてみることです。

例として今回は、「子どもが誰かとアタッチメントを築くことは生まれる前から決まっており、誰とアタッチメントを築くかは生まれた後に決まる」ということについてお話しします。

私たちは普段、頭で考えて行動するなど理性的に過ごしているという意識があるため、人も動物の一種であるということを忘れがちではないでしょうか？例えば私は、普段からよく運転をしますが、運転中にブレーキを踏むタイミングが少し遅れ、ハツとして、全身から冷や汗が出ることがあります。この冷や汗や恐怖感、生まれた後に学習して感じるようになったものではなく、生まれる前から備わっている、命の危険への本能的な反応です。これは乳幼児期も同じであり、乳幼児も命の危険や怖いことから本能的に身を守る機能を持っています。

アタッチメント理論では、人は生き残る確率を高めるため、必死に誰かと関係性を築くことを欲する動物の一種であると、進化論を用いて説明しています。特に乳幼児期の哺乳類動物は、飢えや寒さや捕食動物から一人で身を守ることができず、自分を守ってくれる誰かと一緒にいることで格段に生き残る確率が高まります。この誰かと一緒にいたいという欲求は、進化の過程で生じてきた、生まれる前から備わっている特徴といえます。



一方で、子どもが誰と関係性を形成するかということは、生まれた後に育まれると考えられています。例えば死別や離婚などの理由により、子どもが血の繋がっていない親と共に暮らし、親密な関係性を築いていく、ということはよくあります。実際に皆さんのまわりでも、思い当たる方がおられるかもしれません。また、異性の夫婦では、子どもは母親と一緒にいたいという行動を示すことが多いですが、母親よりも父親と一緒にいたいという行動を示す子どもがいた例もありました（Umemura et al., 2013）。

さて、ここまで子どもは不安が高まった時に誰かと一緒にいたいという欲求を持って生まれ、誰と一緒にいたいかは生まれた後に決まってくるということについて紹介しましたが、ここからは、この特徴を示した興味深い研究の一つを紹介します。それは、Bennett（2003）によってアメリカで実施された、海外から養子をもたらした15組のレズビアンのカップルへのインタビュー調査の研究です。

この研究では、いくつかの仮説が考えられます。例えば、もしも血の繋がっている親を好むことが生まれる前から決まっているのであれば、どちらの親とも血の繋がりが無いこの子ども達は、どちらの親も好まないだろうと考えられます。もしくは、子どもが生まれる前から生物学的な女性と一緒にいることを好むと決まっているならば、レズビアン親は、両者とも生物学的には女性であるため、子どもは

両方の親と同じくらい一緒にいたいという行動を示すであろうと考えられます。もう一つの仮説は、子どもが生まれた後に生物学的な性別に関係なく一緒にいたい親を選ぶのであれば、異性の夫婦によく見られるように、子どもはどちらかの親と一緒にいたいと主張するようになるだろうと考えられます。



結果として、養子をもってから1年半後のインタビューにおいて、研究に参加していた15組中、12組のカップルは、子どもがどちらか一方の親と一緒にいたいという行動を示したという報告をしました。カップルは、家事や育児をなるべく平等に分担していたにもかかわらず、子どもが、生まれた後に一緒に過ごした時間が長い親や、子どもの感情的な要求によく気が付く親を好むようになっていたと話していました。つまり、子どもは、血の繋がりや生物学的な性別に関係なく、生まれた後に一緒にいたい親を選ぶという仮説を支持していました。

なお、カップルは、子どもが恐怖、痛み、ストレス、悲しみを感じた際や、夜中の暗闇などにこのような傾向を示していたことを報告しました。これは、アタッチメント理論が提唱する、子どもたちが不安や危険を感じたときに誰かと一緒にいたいと感じる欲求が高まるという、まさに子どもが生まれる前から持っているといわれる進化論の説明と一致します。

今回は、アタッチメントについて、生まれる前の要因と生まれた後の要因があるということを紹介しました。さて最後に、話は少し逸れますが、実践的な話題にも触れてみたいと思います。アタッチメント理論や Bennett (2003) の研究によると、同じ家庭であっても、子どもが一人の親と形成するアタッチメントと、もう一人の親と形成するアタッチメントは、いつも対等であるとは限らないこととなります。親たちは、このような状況にどのように対応するとよいのでしょうか。

Bennett (2003) の研究でもう一つ興味深い報告をご紹介します。レズビアン親の中には、子どもが自分ではないもう一人の親と一緒にしようとするのに、ちょっとした傷つきや嫉妬を感じていると語っていて、この子どもの行動の差に気が付いている人がいました。しかし、この好まれなかった方の親の中には、子どもが誰かとしっかりとした関係性を形成できていることの喜びと、この差を受け入れて子育てをしていると語っていた人もいました。

私は、カップルが、どちらが勝ったなどの競争に終始しているのではなく、お互いにこの状況を受け入れて子育てをしていることに、心が温まりました。競争ではなく、親どうし寄り添いながら乳幼児期の子育てに向き合うことの大切さを改めて感じさせられます。

引用文献

Bennett, S. (2003). Is there a primary mom? Parental perceptions of attachment bond hierarchies within lesbian adoptive families. *Child and Adolescent Social Work Journal*, 20(3), 159-173.

Umemura, T., Jacobvitz, D., Messina, S., & Hazen, N. (2013). Do toddlers prefer the primary caregiver or the parent with whom they feel more secure? The role of toddler emotion. *Infant Behavior and Development*, 36(1), 102-114.